

ミュージアム 通信

潮の満ち干きに 想いを寄せて — 潮干狩り

[プロジェクト・レポート]
宇和島伊達家伝来品・十種香箱
復元制作プロジェクト

[かわら版]
紅ミュージアム年間スケジュール
講座のご案内



「潮干狩り」(部分)・鳥文齋画・画・たばこと塩の博物館所蔵

潮の満ち干きに想いを寄せて— 潮干狩り

貝を拾って、
厄も祓いませう

旧暦三月三日の雛祭り
と時を同じくする頃(新
暦四月上旬頃)、一年中で
最も潮の満干の差が大き
くなる。明六つ過ぎから
潮が引き始め、だいたい
正午頃には干上がり、海
底が姿を現す。干潟には
取り残された浅蜷や蛤な
どの貝類があらこちら
に散り、いよいよ潮干狩
りの季節到来である。

晩春の季語でもある
潮干狩りは、まさに当節
の風物詩だ。江戸近郊で
は芝浦・高輪・品川・洲崎
などが、上方では住吉・
堺がメジャー所であり、
男女問わず庶民の行楽
として根付いた。

そもそも潮干狩りの
起源は、雛祭りのそれと
も通じてあり、襦・祓いの
雛を流す水辺の行事(流
し雛)から展開したもの
と言われている。現在で
も雛祭りの日に海辺で

貝を拾って遊ぶ「磯遊び」の風習が残る地方があるが、潮干狩りは貝を拾い集めるレジャーであると同時に、水辺で厄を祓う、大切な行事だったのである。

干潟を彩る「潮干小袖」の美女たち

江戸時代の海岸は、現在とは随分異なり、砂浜が多く、広大であった。



「江戸名所 品川汐干狩」・歌川広重(二代)画・品川区立品川歴史館所蔵

そのため、多種の二枚貝はもちろん、蛸や小魚、

鮑やさざえに至るまで大潮の干潮時には姿を現したという。人々は、貴賤・老若男女を問わず、朝から大勢で繰り出し、潮干狩りに興じた。

その一方で、潮干狩りの会場を賑わせたのが、豪商や武家などの良家の娘たちの華やかな出で立ちであった。娘たちの美しい装い「潮干小袖」は、潮干狩りを目にも楽しい行事として彩った。

貝拾いに込めた想い

このような様子を、江戸の文人たちは俳句や川柳などに詠い、絵師は風景画や美人画として描いた。

その代表的な作品ともいえる版本が、一七八九年(寛政元)頃に刊行された『潮干のつと』である。狂歌師朱楽菅江編、浮世絵師喜多川歌麿による彩色摺絵入狂歌本。潮干狩りの土産物という意味をもち、三十六種の貝を



『潮干のつと』全十丁うち二丁目潮干狩図・国立国会図書館所蔵

詠み込んだ貝歌合せのような狂歌集になっている。始めと終わりに当時の美人風俗図が描かれ、潮干狩りの優美さを表現。空摺りや雲母など、当時の最高水準の技術を駆使して制作された華美で贅沢な作品は、版元蔦屋重三郎によりプロデュースされた。

これほどまでに江戸の文化人が注目した潮干狩り。彼らを惹き付けた理由は、果たして行楽的な人気だけだったのだろうか。かつて古人は、春の潮や貝拾いに特別な想いを

寄せた。

「手に取るがからに忘ると海人の言ひし恋忘れ貝言にしありけり」(意識・手に取るだけで、憂いをすぐに忘れられると海人が言った恋忘れ貝は、ただ言葉だけのものに過ぎなかつたよ。『万葉集』巻十一・二一九七)

「我が袖は手本通りて濡れぬとも恋忘れ貝取らずは行かじ」(意識・私の衣の袖が濡れてしまうとしても、私は恋忘れ貝を拾いに行かずにはいられない。『万葉集』巻十五・三七一一)



「三月塩干」・歌川豊春画・品川区立品川歴史館所蔵
東海道の品川宿から臨む品川沖の潮干狩り風景

忘れてしまいたいほどの恋の苦しさを、想い人

との離別の悲しさを、忘れ貝(二枚貝)に詠った作品である。時を下って江戸文化人の心にも、こうしたロマンチズムがあるいは響いていたのかもしれない。

賑わう干潟あれこれ

一方で、俳句や川柳では、江戸の賑やかで活気ある潮干狩りの様子が、人情味溢れるタツチで詠まれている。

「ざうり買う小家うれしき汐干かな」与謝蕪村
春の大潮には、潮干狩りの客を目当てにした小屋が建ち、お祭りのような賑わいがあった。子供が親に草履を買ってもらう、微笑ましい様子がかがえる。

「客をうつちやて娘の汐干狩」

来客が予定されていた三月三日の雛祭りだが、潮時と重なったので、客を待たせて潮干狩りを優先。雛祭りの節句料理に

も欠かせない蛤は縁起物だ。親子の必死な様子が笑いを誘う。

「はまぐりをつぶてに
なげる汐干がた」

獲れ過ぎた貝を放った



「潮干狩り」・鳥文齋栄之 画・たばこと塩の博物館所蔵

のか、転がっている蛤を拾っては、仲間や海に投げて遊ぶ声が、干潟に響き渡るような光景である。

「蛤を捨てて命をひろふなり」

浅蜷より沖に生息する蛤は、干潮時しか獲るこ

とができない。沖方面に出た人は、気が付けば沖の州に取り残され、岸に戻するには大量の蛤が重過ぎて溺れそうになる。結局、蛤を捨てて命拾いしたという笑い話まであったようだ。

自然に恵まれた江戸の干潟では、七輪に鍋をかけ、その場で魚や貝を料理することもあった。また、持ち帰った浅蜷や蛤は、二三日の間、庶民の食卓を賑わした。鍋の中で転がる貝のカランカランという音が、江戸の長屋中に響き渡ったほどであったという。

貝が日本の文化に欠かれない存在であったことを、あらためて感じさせてくれる潮干狩り。現代日本の干潟で、我々は先人たちの想いをどれだけ拾うことができるだろうか。

【参考】

江戸の潮干狩り名所のひとつ品川沖の歴史は、品川区立品川歴史館で紹介されています。

プロジェクト・レポート

幕末雄藩・宇和島伊達家ゆかりの香道具の復制に現代職人が挑む
宇和島伊達家伝来品・十種香箱

復元制作プロジェクト

伊勢半本店では、現在、宇和島伊達家に伝わる香道具箱（左図）の復元制作プロジェクトを進めています。

本プロジェクトは、一昨年十二月に、石川県の漆芸家を中心とした約三十名の職人と共に始動。江戸時代の高度な技術に現代の職人が挑み、読み解き、習得した技を後世に伝えてゆくことを

目的としています。また、短期間で漆芸・陶芸・金工など多分野の技が結集してひとつの作品を制作するという、現在行われなくなっており、「工房体制」の意義についても検証を行います。

本資料を成すのは、大名道具に相応しい、江戸期の技の粋。それが結実して一式となった香道具は、目に贅沢な一品。

しかしながら、復制にあたる職人にとっては気品溢れる本歌作品と向き合うほどに、己の力量を試される辛辣な「場」となります。さらに、復制を通じ、他工程の仕事を目の当たりにすることで、過去と現在の技の集積の中で浮き彫りとなる自身の腕。このシビアナな状況下で、若手を含む多くの職人が、お互いに切磋琢磨しながら完成に向けた追い込みに入っています。

今秋開催予定の企画展では、復制品と本歌作品を同時公開。写すことを通じて明らかになった、香の文化と香道具に注がれた職人の技巧をご紹介いたします。本プロジェクトの成果をお披露目と、どうぞ楽しみにお待ち下さい。



黒塗御紋散梅に竹文蒔絵香道具箱・(財)宇和島伊達文化保存会蔵
幕末の四賢侯といわれた伊達宗城を輩出した宇和島伊達家は、仙台藩主伊達政宗の嫡男を祖としています。香への造詣が深かった政宗から譲り受けた貴重な香木や、優れた香道具を、今日に至るまで守り続けています。

◆紅ミュージアム年間スケジュール

		イベント	休館日・閉館時間の変更等
2011年4月			4(月)、11(月)、18(月)、25(月)
5月	22(日)	第11回「江戸の化粧再現講座」 14:00～15:00 講師:弊社スタッフ 定員15名・参加費500円(紅染めの上生菓子付き)	2(月)、9(月)、16(月)、23(月)、30(月)
6月	25(土)	「大人のおりがみ講座」 14:00～16:00 講師:おりがみ会館(国際おりがみ協会)館長 小林一夫氏 定員10名・参加費1,500円	6(月)、13(月)、20(月)、27(月)
7月			4(月)、11(月)、19(火)振替、25(月)
8月	4(木)/5(金)	夏休み特別講座 「夏休み子ども自由研究 紅ってなあに」 14:00～15:30(各日) 講師:弊社スタッフ 定員10名(各日・親子2人1組で5組)・参加費無料	1(月)、8(月)、15(月)、22(月)、29(月)
9月			5(月)、12(月)、20(火)振替、 23(金)～30(金)展示替えのため
10月	【予定】 1(土)～30(日) 【予定】 15(土)	企画展「宇和島伊達家伝来品・十種香箱が語るもの —「技」を写し、学び、伝えること—」(仮称)開催 企画展関連講座「匂い袋づくり」 講師:山中瑞穂氏(香道家) 定員10名・参加費2,500円	3(月)、11(火)振替、17(月)、24(月)、 31(月)～展示替えのため
11月	13(日)	第12回「江戸の化粧再現講座」 14:00～15:00 講師:弊社スタッフ 定員15名・参加費500円(紅染めの上生菓子付き)	～4(金)展示替えのため、 7(月)、14(月)、21(月)、28(月)
12月			5(月)、12(月)、19(月)、26(月)、 29(木)～31(土)年末のため
2012年1月	21(土)	「風呂敷講座」 14:00～16:00 講師:日本風呂敷協会東京支部 定員8名・参加費2,500円	1(日・祝)～4(水)年始のため、 10(火)振替、16(月)、23(月)、30(月)
2月			6(月)、13(月)、20(月)、27(月)
3月	17(土)	第3回「折形講座～江戸の優美なこころ・祝いの包み～」 14:00～16:00 講師:有馬霞水氏 定員8名・参加費1,000円	5(月)、12(月)、19(月)、26(月)

*都合により、内容の変更が生じる場合がございますので、あらかじめご了承下さい。

Information

かわら版

第11回「江戸の化粧再現講座」のご案内

江戸時代の女性たちは、紅・白粉・墨のわずか3色で粧いました。本講座では、当時の化粧書や美容指南書の記述をもとに、学芸員の解説と共に化粧デモンストレーションをご覧ください。

2011年5月22日(日) 14:00～15:00

要予約・定員15名・参加費500円(紅染めの上生菓子付き)

※お問合せ・お申込みは紅ミュージアム(03-5467-3735)まで。

新商品のご案内

伊勢半本店では、3月31日(木)まで小町紅『手毬』を期間限定販売いたします。今春は新柄「唐花」が登場。永遠を意味する唐花と唐草をあしらったデザインは、雛祭りや卒業、入学、就職など、大切な方へのお祝いの贈り物に最適です。



Since 1825
伊勢半本店 紅ミュージアム

●開館時間/11:00～19:00 ●休館日/毎週月曜日 ●入場無料 (月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL&FAX:03-5467-3735 東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehan.co.jp>